



# 怪異譚



鳴海 はるか

「転校生の宮守仁です。よろしくお願ひします。」

教壇の担任の横に立っていた自分は手短に挨拶を済ませる。

自分は冗長なことがあまり好きではない。

「宮守は幼い頃はこちらで暮らしていたそうだ。神尾神社の跡取り息子だそうだ。見知っているものもいると思うが、仲良くしてやってくれ。」

余計なことは言わないで欲しい。すでに今の一言でヒソヒソ言っている生徒がいる。

小学校に入学してすぐに自分はこの神尾町を離れ、そして今ほぼ10年ぶりに帰ってきた。

この町から離れたのもこの町に戻ってきたのにも理由があった。

そしてそれはどちらもよい理由ではなかった。

自分はこの世に生を受けたときから悪霊や呪いの類を惹きつける能力があり、それが年齢を重ねるごとに強くなっていった。

そして小学校に入学してまもなく多数の人が見ている前で一人の児童が亡くなった。

その理由がおそらく自分の能力の影響だというわけで、祖父の知人の寺に預けられることになった。

なぜ預けられることになったかという、まずこの能力は祓えるようなものではないということ。

能力を制御できるようにするために鍛錬する必要があるが、両親にはそういった能力を持たない一般人なので無理、祖父は宮司の仕事が忙しいために無理ということ。

そしてこの町を離れて寺で鍛錬をすることになったのだ。

最初こそ厳しかった寺での生活も1年もすれば慣れ、今では能力をほぼ完璧に制御できるようになった。

そして今度は祖父の死によってこの町に帰ってきた。

両親には能力が無いため正式に宮司を務められる人間が自分しかいないためだ。

物心ついた頃から祖父について周っていたしそのうち自分が祖父の仕事を継ぐことになるであろうことは予想はしていた。

実際この若輩の身でどこまでできるかはわからない。

しかし幼少の記憶と祖父の遺品より知恵を借りて何とかやっていくしかない。

寺での修練の成果もあるだろう。

不思議とそんなに焦りや不安は湧かなかった。

だが学業との両立はかなり困難だということはわかっていたがために、それ以外の不安要素はなくしておきたかったのだ。

「宮守の席は窓際が一番後ろに用意してあるからそこを使ってくれるか。」

「はい。」

とりあえず自分の席に接しているのが前と横の生徒だけというのは正直ありがたかった。

しかも顔見知りでもない。

とりあえずは興味本位で詮索されることはあってもそれくらいのものでらう。

前の席は男子で横は女子だった。

前の席の男子はこちらから声を掛ける前に向こうから声を掛けてきた。

「俺は田村悠斗。隣町から通ってるんだ。何か分からないことがあったらなんでも聞いてくれよな。」

「ありがとう。よろしく。」

次に隣の席の女子に声を掛けようとしたが向こうを向いてしまった。

どうしたのだろうと思っていると田村が耳打ちしてきた。

「あいつはいつもあんな感じだよ。式町美鶴っていうんだ。普通にすれば結構かわいいと思うんだけどな。」

自分はそのとき何か違和感を式町に感じていた。

転校から数日。

学校ではなるべく目立たないように気をつけ生活していたため、一部の自分を知っていた生徒も特に何も言わなくなっていた。

田村だけは相変わらずなんだかんだと自分にかまって世話を焼いてきていたが、嫌味なところもなくいいヤツだったのでこちらも気兼ねなく世話になることができた。

とりあえず校内のことはほぼ田村から教えてもらったとっていい。

田村の他にも何人かの生徒も話しかけてくるようになった。

だが、相変わらず式町は何も話しかけてこなかった。

それどころか声を聞いたことすらない。

授業でもなぜかどの教諭も式町を指名することは無かった。

そして相変わらず式町には何か違和感を感じ続けるのだった。

その日は放課後に担任の教諭から頼まれごとがあったのでそれを終えてから帰ることになった。

それが終わり鞆を手にしたときに何気なく窓の外を見ると式町の姿が見えた。

上級生らしき女子3名に連れられて後者裏の方へと消えて行った。

ひょっとしていじめでも受けているのだろうか？

自分は急ぎ校舎裏へと向かった。

そして校舎裏への角を曲がる直前に複数の悲鳴が聞こえた。

慌てて角を曲がると、そこには尻餅をつき震える2人の女子とそれを見下ろす式町、そして彼女から黒い靄が立ち上っていた。

そしてその時黒い靄が動いて3人の女子を襲おうとした。

「式町っ！」

自分の恫喝とともに黒い靄が動きを止めた。

「そこの女子、早く逃げろっ！」

3人の女子はほうほうの体で逃げていった。

そこで式町が振り返った。いつの間にか黒い靄は消え去っている。

そのまま式町は立ち去ろうとしたが、自分の手がその腕をつかんだ。

その瞬間、自分の中に邪な念のようなものが入り込んできそうになって呼吸が止まりそうになる

。

とっさに空いたほうの手で首から掛けてある数珠を握るとそれ以上の思念の流入を抑えることができた。

「・・・なにか用？」

式町が始めて口を開いた。だが今はそんなことに感動している場合ではない。

「ああ。君のその力、呪詛かその類のものだね？」

「何言ってるのかしら？話が見えないんだけど？」

「さっきの黒い靄のようなものことだ。あれは普通のものじゃない。」

「・・・そんなもの見てないし、何のことかまったく分からないわ。私は今から用事があるの。放してもらえないかしら。」

「・・・そうか。それはすまなかった。」

自分が手を放すと彼女はすぐに立ち去ってしまった。

「あれは絶対に異能の力だった。」

先ほどまで彼女が立っていた場所まで行ってみる。

「やはり・・・。」

そこにはやはり人とは違う気配が残っていた。淀んだ黒い気配だった。

次の日。

式町はいつもどおりに登校してきた。

「おはよう。」

「・・・。」

挨拶をしても何も返ってこない。相変わらずだ。

いつも感じる幽かな違和感以外は何も問題なく放課後になった。

たぶん何かあるとしたら今日の放課後になるだろうと、今日は対抗策を用意してきてある。

放課後。

自分は昨日の校舎裏へ行き、体が隠せる場所を探しそこへ隠れた。

ほどなく式町が昨日の3人の女子に連れられてやってくる。

ただひとつ違うのは、一人体格のよい男子を連れていることだ。

やはり昨日のことはまったく懲りてなかったのだな、と思わずあきれてしまう。

「昨日はなんかびっくりしたけど、今日は助っ人もいるし昨日のようにはいかないわよ！」

女子のリーダー格と思われる一人が叫んだ。

「コイツ頭は悪いけど喧嘩はすごく強いんだから」

「頭は悪いは余計だろ」

男子が頭をぼりぼりと搔きながら答える。

「野郎相手かと思ったら女の子かよ。俺は女相手には手を上げないぜ？」

「コイツは普通の女じゃなくて変な手品みたいなことできるのよ。だから馬鹿なあんならどうかできると思って私は呼んだのよ？」

「手品師だか魔法使いだか知らないけどそういうの俺信じないし。それじゃ俺帰るわ。」

「ちょっと待ってよあんな！」

女子の静止の声も聞かずに男は帰ってしまった。

「まあいいわ。昨日はびっくりしたけど今日はもうあんな手品にだまされないんだから！」

そう言って3人まとめて式町に襲い掛かろうとした。

だが3人の手が式町に届くことは無かった。

3人は3本の手のような形をしたものに押さえつけられていた。

3人は声を出すこともできないらしい。

さらにその手はそのまま押し潰そうとする。

そこへ自分は飛び出していった。

そして手にした日本刀で。

その手を斬りおとす。

手は斬られた瞬間に女子たちを押さえつけていた部分は霧散した。

だが式町から出ているほうの本体、その部分から今度は自分に向かって無数の手が伸びてくる。

それに向かって今度は清めの塩を振りまく。

その動きが止まるか止まらぬかの一瞬の間を突いて式町の胸元へ神札を当てる。

「祓い給え、清め給え。」

すばやく三唱する。

すると黒い靄はすべて消え去り、式町は糸が切れた操り人形のように崩れ落ちそうになった。

その体を受け止め3人の女子の方を見るとようやく気がついたようだった。

「大丈夫か？」

と声を掛けたところで悲鳴を上げて逃げられてしまった。

よく考えれば抜き身の日本刀を片手にぐったりした女子を支えた状態なのだ。

誰でも悲鳴を上げるだろう。

これ以上騒ぎになる前にこの場を離れる必要があるな。

刀を鞘にしまい刀袋へと収めると、しばらく目覚めそうに無い式町を背負って家へと向かった。

「う・・・うん・・・。」

どうやら式町が目を覚ましたらしい。

「どうだ、気分は？」

式町は自分を見ると慌てて立ち上がろうとしたが、そのまま転びそうになる。

「まだ本調子ではないから無理はしない方がいい。一応簡単な清めはしておいた。」

式町を支えながら言う。

「・・・ありがとう。」

式町は少し俯きながら答えた。

「今から人形を渡すから体を拭って息を吹きかけて自分に渡してもらえないか？後はそれをこちらで焚き上げするから。」

人形を渡すと彼女はいわれたとおりにしてそれを自分に手渡した。

「・・・あの、私はどうなって・・・。」

「君はもともと大きな霊力を持ってるみたいだ。だが、君自身それにまったく気がついていなかったかと思う。

そこを悪い霊や呪いといった負のエネルギーが依り代としてきた。」

式町は驚いているようだ。

「言い方は悪いが君の力に寄生して君の負の感情を増幅させて今回のような事件を起こさせようとしたんだ。」

「それなら、これからももしかしたら今回のようになることもあるんじゃないか・・・。」

「そうだね。このままだとそれも十分ありえる。」

式町の顔色が一気に暗くなる。そこに続けて言った。

「しかしこのように関わったいじょう、このまま途中で放り出すつもりは無いから安心していい。

君には清めの他にもその霊力を制御する方法を教えるつもりだ。

あと、もし何か異変を感じたらすぐにここに来るといい。ここには不浄なものは用意には入り込めない。」

式町の顔がぱっと明るくなる。初めて見る笑顔だ。

「それでは今日はもう遅いから君の家まで自分が送っていこう。」

途端に彼女の顔が曇った。

「・・・私、家には帰りたくないんです・・・。」

「どうして？」

「私、家で疫病神扱いされてて・・・。両親も離婚して父だけになってからは父に暴力を振るわれたりして・・・。」

式町は泣き出してしまった。

「それでは自分の家にしばらく住んでもいい。とはいえ一応先に両親に聞いてから了承をもらわなければならないが。



あと、もちろん式町にそういう意思があればだが。君の父君にはたぶん聞いてもいい顔はされな  
いだろうが自分が代わりに連絡をしてもいい。」

「もし、もしそうならお願いします。」

自分は両親に了承を取った後（嫁候補が来たとか散々冷やかされた）、式町の家電話を掛けた  
。

正直想像していた以上のひどさに閉口してしまうような言い方でこちらも了承された。内容はと  
ても式町にはいえないが・・・。

一応問題は片付いたので式町を実家の方へ連れて行った。

「いらっしゃーい！あらまあ、可愛い子じゃないの！仁、転校早々に彼女作るなんてなかなかや  
るじゃない？」

母がそんなことを言いながら小突いてくる。問題は片付いたと思ったらここが一番の問題だった  
かもしれない・・・。

「・・・すみません。しばらくお世話になります。式町美鶴です。」

式町は真っ赤になりながら自己紹介していた。

「何も気兼ねしないでな。ここが自分の家だと思ってくれればいいから。高校も家から割と近い  
しいだろう。」

と父も上機嫌だ。そこに間髪いれずに

「部屋も空いてる部屋がたくさんあるからどこ使ってもいいわよ？なんなら仁と一緒に部屋  
でも・・・。」

寺にいるときは男女関わらずに同じ部屋で寝ていたので自分はまったく気にしなかったが、式町  
はえらくあたふたして

「あ、あの、別の部屋で・・・。」

と湯気が立ち上りそうなくらい真っ赤な顔で言うのだった。

私の名前は式町美鶴。

つい先日、同じクラスに転校してきた宮守君に助けられて、なんと同じ屋根の下で暮らすことになった。

あの時のことは上級生に言いがかりをつけられて絡まれてからの記憶はない。

そして気がついたのは宮守君の神社の本田だったわけだ。

それにしても昨日は自分でも驚くくらい即決で家を出て宮守君の家にお世話になることにしたけど、時間が経つ程に夢だったんじゃないかと思えるくらいだ。

あの後必要な物を取りに自分の家に帰ったが、私の父親はまったく無関心だった。ちょっと逆に拍子抜けしてしまうほどだった。

翌日は早朝から宮守君が昨日の人形をお焚き上げしてくれた。

これで私の体についていた穢れを祓うそうだ。

それから朝食をいただいて二人で学校へ向かった。

食事や生活などは普通の家庭と変わらなかったのが驚いたが、宮守君のお父さんに「別段一般家庭と変わらないと思うよ？」と笑われてしまった。

最初は緊張していたが生活面も問題ないし、宮守君のご両親もとても良い方だったのでとても嬉しかった。

学校へ向かう道中で宮守君はお守りを私にくれた。中にお神札が入っていて身を守ってくれるらしい。

念のためにできるだけ肌身離さずつけておくように言われた。

まあでも学校でも宮守君は隣の席だしあまり気にしなくてもいい気がするけどな、とか思ったのは彼には秘密だ。

それにしても宮守君はほとんどしゃべることがなかった。

私は今までめったに人と話したことがないからほとんど無言のまま学校に着いてしまった。

教室に入ると田村君が驚いて宮守君に話しかけた。

「おいおい、なんでお前が式町と一緒にいるんだよ？ひょっとして付き合い始めたのかよ？」ニヤニヤしながらしゃべる田村君。私のほうも見てきたので私は思わず赤面しながら俯いた。

「別にそういうわけじゃない。詳しくはいえないが、とある事情で彼女には我が家で暮らしてもらうことになった。」

田村君は一瞬呆けたような顔をしていたが、我に返ると大声でまくし立てた。

「お、おい！なんですか、同棲ですか！？婚約ですか！？結婚ですかあー！？」

あまりにも田村君が大声を出すもんだからクラスの視線がこちらに集中する。

宮守君をチラ見してみると、彼もばつが悪そうな顔をしていた。

「そんなに騒ぐな。それに婚約だとか結婚だとかそういうことはまったくない。そもそも交際すらしていない。」

・・・そこまで否定されるとちょっと悲しいかも。実際そんなことはまったくないんだけど。

「おーい、HRを始めるぞ。みんな席につけー。」

タイミングよく先生が来てくれたおかげでこの話はとりあえず終わりになった。

宮守君がそこで私にそっと耳打ちした。

「すまなかった。」

それからは授業中は良かったけど、放課後にはほかの女子から質問攻めだった。今まで話したこともない子がほとんどだったけど、本当に女の子はこういう話が好きだなあってちょっとうんざりだった。

宮守君は相変わらず田村君から質問攻めだった。彼は無言を貫く方針みたいだった。

私は宮守君のように意志が強くないし適当にしゃべってしまおうかと思ったけど、結局うまく説明する自信もなくほとんど前も向けなかった。そもそも普段からほとんどしゃべったこともないんだから仕方ない。

騒動も放課後になる頃にはほとんど収まっていた。

渦中の二人が何もしゃべらないんだからそれもそうだ。

ただとりあえず担任にだけは伝えておかないとまずいと思い、昨日の騒動のことには触れずにうちの家庭状況を知った宮守君の両親が面倒を見てくれるようになったと宮守君が言ってくれた。後で知ったことだが、宮守君はご両親と相談してそのようにしようと打ち合わせしていたらしい。

担任が宮守君の家に確認の電話を掛け、納得したようだ。私の家は電話しても父は出なかったけど。

こうしてようやく私たちは学校を出て帰路につくことができた。

「今日は大変だった。」

宮守君は独り言のようにつぶやいた。

「本当に大変だったよね……。」

あー、何で私はこうも話の続かない相槌を打ってしまうんだろう。でもその後を宮守君が続けてくれた。

「今日からしばらく帰宅後に禊を行おうと思う。」

「禊？」

「何も難しいことはない。家の裏手の林の奥に小さな滝と川がある。その川にしばらく浸かって身を清めるだけでいい。

自分も一緒に行くから何も心配しなくていい。」

家に帰ると白装束を渡されたのでそれに着替える部屋を出るとすでに先に着替え終わった宮守君が部屋の前で待っていた。

「ではいこうか。」

思ったより近くにそれはあった。へー、こんなところに滝と川があったなんて知らなかった。

一人で感心していると宮守君に声を掛けられた。

「自分はこちらの滝に打たれているから式守は川の適当なところで身を清めていてくれないか。」

それだけ言うと宮守君は滝がちょうど頭のとっぺんに当たる位置まで行って、手のひらを合わせ目をつぶって何もしゃべらなくなった。

私も宮守君に言われたとおりに川に入って身を清めようとした。が、片足を入れた瞬間に思わず叫んでしまった。

「冷たっ！」

宮守君は目を開けて私に声を掛けた。

「無理に全身を浸からせようとしなくていい。じきになれると思うがまずは足だけでもいい。」

足だけでもこんなに冷たいのに、本当は全身浸からせるってこと？っていうかじきってことはこれを毎日やるのかな……。

さすがにちょっとげんなりしてしまった。

結局たぶん私は5分くらいしか水に使っていられなかったと思う。でも宮守君はたっぷり30分は滝にうたれていた。

正直に私は感心して宮守君に話しかけた。

「私は冷たくてぜんぜん水に浸かることができなかつたのに、宮守君はすごいね。あんなに長い間滝に頭から打たれてたんだもん。」

「慣れればあれくらいはどうと言うことはない。真冬の寒いときでももっと長時間浸かることもできるようになる。」

「そうなんだ・・・。」

素直に関心てしまった。私にはそんなことできる気がしない。

穢れを祓う前に体を壊してしまいそうだ。

禊から帰ってきてから夕食までの間、今日出された課題と宮守君のもといた学校との勉強の進度の間を埋めるために二人で勉強会をすることになった。

勉強は宮守君の部屋ですることになったのだけれど自分以外の他人の部屋に入ることもほとんどなかったのに、突然男の子の部屋に入ることになったので緊張してしまった。

宮守君の部屋はとても綺麗に整頓されてた。

偏見かもしれないけど、男の子の部屋は散らかっているというイメージがあったのでちょっとびっくりしてしまった。

「お邪魔します。」

部屋の中央にローテーブルと座布団が置いてあって、座布団をもう1枚宮守君が出してくれた。

私は宮守君の対面に座ると勉強道具を広げていった。宮森君も同じように勉強道具を広げていった。

いろいろと二人で教科書とにらめっこしながら進捗を見ていったけど、そんなに開きはないみたいだった。それどころか宮守君の予習分がすでに進んでしまっているくらい。

「とりあえず課題をやるくらいしかないみたい。」

それから二人が課題を終えるまでそれほど時間はかからなかった。

「二人とも、ご飯ですよー。」

ちょうど二人が勉強を終わらせるのとほぼ同時に宮守君のお母さんが私たちを呼んだ。

そういえばお夕飯のお手伝いくらいはしないと申し訳ないと思っていたのにすっかり忘れていた。

勉強道具を片付けて居間へ行くと、もうすでに料理の支度はすっかり終わっていた。

「すみません。今度は私も手伝いますから・・・。」

すっかり恐縮した私はそういった。でも宮守君のお母さんはまったく気にしていないようだった。

「いいのよ、そんなに遠慮しないで自分の家のようにくつろいでね。」

「ありがとうございます。じゃあできるときにはお手伝いをしてもいいですか？」

私が言うと宮守君のお母さんはやんわりとした笑みで

「それじゃあできるときには甘えちゃおうかしら。よろしくね。」

と言ってくれた。その言葉に続けてお父さんも言ってくれた。

「昨日からもう私たちは家族同然さ。遠慮も何も要らない。相談でも何でも受けるから何でも言ってくれよ？」

実家にいるときは優しい言葉のひとつも掛けられたこともなかった私は、思わず泣いてしまいそうになるほど嬉しかった。

そしてそのとき電話のベルが鳴った。

「美鶴ちゃん、お父さんから電話よ？」

「はい。」

そこはかたなくいやな予感がしたが、替わらないわけにはいかない。

宮守君のお母さんから受話器をもらうと、自然と口調が重くなりつつ話しかけた。

「替わりました。美鶴です。」

「お前、飯も作りに来ないつもりか！？今まで育ててやった恩を忘れてんじゃねーよ！」

開口一番の怒号に耳がキンキンする。

「お前よ、あんまり調子こいてんじゃねーぞ。なんならお前だけじゃなくそっちの家族も一緒にしめてやるぞ！？」

そのいとことで私の中に黒い感情が湧き起ってくる。何でこの親はこんなに自分勝手なんだろう。いっそ殺してしまおうか・・・！

そのとき宮守君の手がぽんと私の肩に置かれた。

はっと我に返った私に、宮守君は行った。

「式町、邪念を持たないように心がけないといけない。穢れが君の体に流れ込もうとしている。電話は自分が替わる。君は心を落ち着けるんだ。」

今までの会話は父の大きな怒声のせいでほとんど聞こえていたらしかった。

後は宮守君に言われたとおりに気持ちを落ち着けるために深呼吸をして気持ちの高ぶりを鎮めた。

「美鶴さんの父君ですか。自分は美鶴さんの同級生の宮守仁と申します。」

宮守君はいたって冷静だった。いつか彼のようにいつでも平常心を保つことが私にもできるのかな・・・。

「ガキが人様の家の事情に偉そうに口を出してるんじゃねーぞ！？親に替われ、親によ！」

「いえ、両親に変わるまでもありません。昨日あなたは美鶴さんをこちらで面倒を見るということに同意しました。それは即ちあなたはあなた自身で生活していくということにほかなりませんよね？」

「ぐっ・・・。だがな、飯くらい用意してくれてもいいだろう？それくらいやっても罰は当たらないだろ？今から美鶴を迎えに行くからな！」

一方的にまくし立てると乱暴に電話を切ったみたいだった。

私はすごく申し訳なくて何度も謝ったが宮守君もご両親も

「全然大丈夫だから気にしないで。あなたのことはちゃんと守るから安心してね。」

と逆に励まされてしまった。

しばらくすると車の急ブレーキの音が聞こえ、

「さっさと出てこい美鶴！家に帰るぞ！」

と玄関扉を叩きだした。私が反射的に玄関へ向かおうとするのを宮守君が手で制した。

「自分が行くから式町はじっとしていればいい。」

玄関を開け宮守君は外へ出て行った。宮守君にはじっとしているように言われたけど、やっぱり

どうしても気になって玄関をちょっとだけ開けて隙間から覗いてみた。

宮森君の声はあまり聞こえなかったが、父の声は怒声だったからまる聞こえだった。

どうやら宮守君は父を諭そうとしているようだったけどまったく聞く耳もたずっていう感じだった。

そうした問答が続いたが、ついには父が宮守君に殴りかかった。

そして、次の瞬間には父は地面に這いつくばってうめき声を上げていた。

私の目にはまったく何も見えなかった。

宮森君はそんな父に向かって体を起こすのに手を貸そうとしたが、父はその手を振り払うと悪態をつきながらすごすごと帰っていった。

宮守君は何事もなかったかのように戻ってくると、

「悪い。話だけで終わらせるつもりだったがうまくいかなかった。」

といって頭を下げた。私は慌てて両手を振って言った。

「そ、そんなことない！謝るのは私のほうなのに・・・。」

私はひたすら宮守君とご両親に感じ入るばかりだった。



数日何事もなく時が流れていった。

式町ももはや日課となった禊を続けながら自分の両親ともうまくやっている。

神社の務めのほうも七五三のお参りや一般の参拝ぐらいで特に大きなこともなかった。

家や神社ではこのように平穩無事な日々が過ぎていたのだが、学校でこの数日でたびたび小耳に挟むことがあった。

「音楽室に幽霊がいる」

というものだ。

この手の類はどんな学校でもよくあるものだから放っておいた。実際、前に在籍していた学校でもまったく同じ噂があったが噂の域を出ることはなかった。

だがそれからしばらくして吹奏楽部の部員が楽器の後片付けをしている最中に幽霊に押されて倒れ、腰の骨を折って入院したという話が広まった。

田村に聞いてみるとどうも吹奏楽部員が骨折したというのは本当のことらしい。

これは一度きちんと調べてみたほうがいいかもしれない。

音楽の授業の際に音楽室の中をそれとなくあちこちと調べてみる。

だが特に怪しい気を感じない。ただの杞憂だったのだろうか。部員が怪我をしたのはただの事故か。

音楽の授業が終わり自分の教室へと戻った。ただ、何か引っかかるものを感じていた。

放課後になったのでいつものように式町と一緒に帰宅をしている途中に式町に話しかけられた。

「あの、ちょっといいかな？」

「かまわない。」

「音楽室の件なんだけど・・・あれってひょっとしたら音楽室じゃなくて準備室の方かも？吹奏楽部員なら後片付けのときは準備室に入るはずだから・・・。」

音楽室と聞いて音楽室のことしか頭になかった。確かに音楽準備室というのは十分に考えられることだ。

「なるほど。それは盲点だった。ありがとう。」

「ううん、役に立てたのなら嬉しいな・・・。」

そして、次の音楽の授業になった。

だが、準備室には鍵が掛けられていた。楽器の授業でもなければ音楽の授業中には鍵が開くことはないだろう。だが残念ながら当分楽器を使う授業はなさそうだ。それに今音楽教諭に鍵を開けてもらうように頼むのも不自然だ。

あとは吹奏楽部が部活動で使用している際に行くかと考えたが、部員でもないのに突然訪ねて準備室を見せてくれと頼むのも不自然すぎる。

どうにか自然に準備室へ入ることはできないのだろうか・・・。

そして結局またいい考えが思い浮かばずに放課後になり式町と帰途につく。

「あのね・・・またちょっと考えたんだけどいいかな？」

自分と式町は二人職員室にいた。

とはいえ教諭に呼ばれてというわけではない。

今は夜だ。自分たち以外誰もいない。式町の提案で夜の学校へ忍び込もうということになったのだ。

自分が一人で来るつもりだったのだが、式町がどうしてもついてくるというので二人で来ることになった。正直夜の学やはり夜の学校というのは人気も無く、暗いせいもあって何か出ると思い込みがちだ、

だからこんな夜の学校になど来たがる女子などいないと思っていたので驚いた。

そして今職員室で音楽準備室の鍵を探している。

夜の学校とはいえ宿直の先生がいるので式町に見張りをしてもらい、自分が鍵を探すことにした。

自分は寺での修行の際に夜目を鍛える訓練をしたので暗闇の中でもすぐに鍵を探し当てた。

式町に鍵を見つけたことを伝え、音楽準備室へと向かう。

式町は夜目が効かないのでライトを点けようとしたが、それだと明かりが漏れて目立ってしまうので自分が式町の手を引いて向かうことにした。最初は式町を背負っていくことを提案したが、なぜか猛烈に拒否されてしまった。

職員室から音楽室までは階段もあるうえ結構遠い。亀の歩みのように遅いが致し方ない。

音楽準備室前に着いたときには、

「・・・正直、精神的に疲れたかも・・・。」

と式町は言っていた。無理もないだろう。

慣れていない者が暗闇の中行動するというのは考える以上にとっても大変なことだ。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・裂・在・前！」

鍵を開け中へ入る前に、念のために切紙九字護身法を行った。

これは九字を結んで邪なものや敵対するものから身を守るために執り行う密教の印だ。

「あ、それ何か聞いたことあるかも？」

と式町が言った。

「でも確か私が見たのはそんな手を組み替えてやるような難しそうなものじゃなくて、空中に線を縦横に引いていくようなものだったけど・・・。」

「それは早九字護身法、俗に言う九字を切る、というものだ。早九字護身法の方は素早く簡単に行えることから自分のような修行をするものから広くは武士や忍びの者なども精神集中や厄除けとして使われていたそうだ。」

「あの、私の認識が間違っていなかったらこれって仏教だか密教だかで扱うようなものだったとおもうんだけど・・・。」

「そのとおり、これは密教で扱う印の結び方だ。とはいえ『臨・兵・闘・者・皆・陣・裂・在・前』の九字は道教に由来するものであるし、九字の文字それぞれにも仏格、神格と仏教の御仏

、神道の神様の二つが内包されている。」

「思った以上に複雑なんだ・・・。」

「まあ突き詰めて考えていくと神道自体も儒教に仏教、キリスト教の教えまで取り入れたこともあったくらいだからそこまでは考える必要は無いだろう。ただ難しいこと抜きで早九字護身法くらいは式町もできると役に立つかもしれない。形だけなら5分もかからずに覚えられるだろう。」

「・・・それじゃあお願いします。」

そこで自分は刀印の結び方から四縦五横に空を切った後、刀印を解くやり方を教えた。

式町は見たことがあるといったのを裏付けるように一度で理解してしまった。

彼女は順調にこれらのことを身に付けていけば、じきに自分を超えられるかもしれないと純粋に感心してしまった。

音楽準備室の鍵を開けると、二人で中に入って手分けして探し始める。式町はライトの光が目立たないように気にしながら、自分とは逆側を探していた。

しばらくすると式町が声を上げた。

「宮守君、この棚の上から何か流れてくるように感じるんだけど……。」

自分も宮守の元へ向かうと、ごくわずかだが気が流れてくるのが分かった。

ごくわずかで見逃してしまいそうな気だったが、式町はよくこれに気がついたものだ。式町の慧眼に感服させられてしまった。

棚はかなり高いもので、自分が手を伸ばしてみたがとても届きそうには無い。周りを見回してみたが、先日の事故で片付けられてしまったのか脚立のようなものも無かった。

仕方なく式町を肩車して上を見てもらうことになった。この時にまた最初に拒否されたのは言うまでもない。だがそれしかないとして式町自身も思ったのか、しぶしぶ了承してくれた。

「棚の上はかなり埃っぽいね……。あ、でも奥に何か入れ物があるよ。」

そのまま式町が手を伸ばす。慌ててその箱を開けないように言おうとしたが、遅かった。

「きゃっ！」

式町がバランスを崩して転倒しそうになるのを何とか踏みとどまった。

出てきたものは髪の高い女のような影だった。

だがその影は出ては来たものの、先ほど結界として行った切紙九字護身法のおかげでそれ以上は近づいてはこれないようだった。

それにこの影はそれほど強い力を持つものではないようだ。

「付喪神か。」

付喪神とは長い年月を経て古くなったり、長く生きた依り代に、神や靈魂などが宿ったもののことだ。

ただこの付喪神はその力が弱いことからそれほど古いものではないだろう。これくらいのものなら鎮めることも難しくなさそうだ。

「式町、まえに渡した数珠は持っているか？」

「ええ、もちろん。」

「それでは数珠を構え先ほど教えた九字を切るんだ。それでそれは引くと思うから、箱の中に入ったのを確認して箱を閉めるんだ。」

式町は言われたとおりに数珠を構えながら九字を切る。

それからしばらくして箱を閉める音がした。

「宮守君、言われたとおりに箱は閉めたけど……。」

「それではその箱を持ってきてくれないか？慌てないでゆっくりとでいい。」

それを式町が持って下りてくると、やっとその正体が分かった。

バイオリン。

かぶっていた埃を払い落とすと、それは結構古いものでありそうだった。

「これは一度本殿のほうで詳しく見てみた方がいいかもしれない。」

念のために神札を貼り付け、鍵を元に戻すと二人は学校を後にした。

その日はもうすでに時刻が遅かったので、バイオリンは本殿に安置して明朝早くに確かめることにした。

朝日が昇るか昇らないかの頃には自分と式町は本殿でバイオリンをはさんで向き合っていた。神札を剥がし、バイオリンのケースを開ける。この本殿には結界が張られているため悪霊や呪いの類はそうたやすくは活動することができない。

ケースは薄汚れていたものの、中身は意外と綺麗なものだった。

バイオリン自体は貴重なものなのかどうかは自分と式町にはまったく分からなかったが、そのケースの中に式町があるものを見つけた。

名前だ。

「M.Hoketsu」とそこには彫られていた。これは手がかりになる。

それにしても「ほけつ」とは変わった苗字だ。どういった漢字を書くのかすごく気になる。

式町も同じことを思ったらしく、

「スポーツとかで使う『補欠』じゃないよね？Mは万年とかだったら笑えない……。」  
といていた。笑えないとか言っている割には笑いをこらえているようだったが。

登校前にお祓いを済ませ本殿に安置して登校した。

ここから自分たちでできることは持ち主を探すことだ。

付喪神を完全にお祓いするためにはできることなら元の持ち主へと返すことだ。

もし見つからなければお焚き上げすることになる。文字通り燃やすのだ。

自分としてはそれでもよかったのだが、式町が強く反対したので持ち主探しをすることになったのだ。

ただ、あのバイオリンケースが結構古いもののように見えたので、いくら珍しい苗字だとは言っても本人を見知った教諭はいないかもしれない。

まずは担任教諭に聞いてみた。しかし思ったとおりに聞いたことが無いという。

次に音楽教諭に聞いてみた。やはり音楽教諭も聞いたことが無いといったが思い出したように言った。

「吹奏学部の顧問の渡辺先生に聞いてみたらどうかしら？渡辺先生は2、30年前にこの学校に赴任していたことがあったらしくて最近またこの学校へ戻ってらしたのよ。」

そこで渡辺教諭のところへ言って尋ねると逆に驚かれてしまった。

「君らは彼のことを知っているのかい？いや、まあそれならいいタイミングだったなー。ずっと彼はドイツの方でプロのバイオリン奏者として活躍していたのだが、久しぶりの休暇を使ってこちらへ戻ってくるから吹奏楽部員に演奏を聞かせてもらうことになっていたんだよ。」

それから詳しいことを聞かせてもらうと今日の昼ごろ職員室に顔を出す手筈になっていることと明日は音楽室で演奏するということが分かった。

昼休みに職員室へ顔を出すと渡辺教諭と向かい合うように一人の男性が立っていた。

渡辺教諭は職員室の扉の前に立っている自分たちに気がつくのと、中へ入るように招いてくれた。

「法華津君、こちらが先ほど話した君の事を探していた子達だよ。」

自分と君島はそろって頭を下げる。

「そんなに改まらなくていいよ。いきなり本題に入っちゃうけど、僕に用があるって言うのはいったいどんなことだったのかな？」

「実はひょんなことから『M.Hoketsu』と名前の入ったバイオリンを見つけたので。」

法華津さんはとても驚いて聞きなおしてくるほどだった。

「今は自分の家の方で預らせてもらっています。差し支えなければ明日にでも学校へ持ってこようかと思っていますが。』

法華津さんはそれまでとても待てない、といった感じで興奮気味に言った。

「いや、もし良ければ放課後に君の家に案内してもらえないか？早くあのバイオリンと会いたくてね。』

放課後になり、法華津さんを本殿まで案内した。

そしてバイオリンを前にするとケースをいたわるように軽くなでた後、そっと開けた。

「ああ、あのときのままだ。」

法華津さんの目には涙があふれていた。

「これは早くに亡くなった父が亡くなる直前に僕に買ってくれたバイオリンでね。当時の吹奏楽部で使ったときに無くしてしまっていたんだよ。たぶん当時のいじめっ子が隠したんだろうけどいくら探しても見つからなかったんだ。」

そこで見つけた経緯を差し障りの無いように伝えた。法華津さんはひたすら感謝の意を自分と式町に伝えた。

「このバイオリンを明日の吹奏学部の演奏で使うよ。良かったら君たちも聴きに来てほしい。」

法華津さんはそうやってとても嬉しそうに帰っていった。

次の日の放課後。

自分と式町は音楽室にいた。

ほどなく法華津さんが姿を見せる。こちらに向かって軽くウインクすると彼はあのバイオリンを弾きだした。

それはとても優しく温かく、心に響く調べだった。